

産地，今(15)

リレー随筆

熊本県のトマトの産地

(熊本県経営技術課主幹農業専門技術員 こまきこういち 小牧孝一)



八代平野の夜を照らす黄色蛍光灯

The Introduction of Tomato District in Kumamoto. By
Kouchi KOMAKI

(キーワード：産地だより，熊本県，トマト)

I 県内の主要産地の概要

本県のトマト栽培地域は、促成、半促成および抑制栽培を主体にした平坦地域（玉名、熊本、宇城および八代地域）と夏秋栽培の高冷地域（阿蘇、矢部および清和地域）とに代表される。作付面積は平坦地域がおよそ 700 ha、高冷地が 400 ha で、本県の主要品目であるメロン、スイカに次いで重要な施設野菜となっている。しかし、最近では経済不況の長期化や輸入農産物の影響等で価格が低迷し、栽培農家にとってはこれまでの作れば売れる時代から、消費者ニーズに即した農産物の生産を目指すことがより重要になってきている。各地域とも「安全・安心」な農産物の生産を全面に押し出して産地のイメージアップを図っている。県でも環境保全型農業の一貫として、エコファーマーの認定や熊本型特別栽培農産物（「有作くん」）認証を積極的に推進しており、エコファーマーについては施設野菜栽培農家を中心に 4,978 名（2003 年 4 月現在）が認定されている。しかし、栽培現場で頭を悩ませているのが、1999 年に県内で新たに発生してきたトマト黄化葉巻病で、その防除対策の確立が急務となっている。ここでは、こうした新たな病害虫の発生など減農薬栽培を進める上で障害となるような状況の中で、黄色蛍光灯を主要技術として普及し、地域ぐるみで減農薬栽培に取り組んでいる八代地域のトマト栽培について紹介する。

II 八代地域のトマト栽培

1 栽培概要

当地域は八代海に面し、冬期の気候は県内でも温暖なところである。古くから沖積土壌地帯と干拓地帯の平野部ではイグサ栽培やメロン、トマトの施設栽培が盛んな地域である。しかし、イグサは中国産が輸入されるようになって価格が暴落し、作付面積は 1989 年

をピークに減少し続け、現在はおよそ 1,800 ha 程度になっている。一方、トマトについては 410 ha（内ミニトマトは 29 ha、2000 年度）と県内でもトップの作付面積を維持し、冬トマトの生産量、作付面積では全国一の規模を誇っている。作型は 8 月中旬定植、翌年 1~2 月まで収穫する冬トマトが約 8 割を占め、後作にメロンが導入される体系が主体であったが、メロンの価格が低迷しているなどの理由で 6 月まで収穫を引き延ばす作型が増えつつある。品種は、'ハウス桃太郎' が主体である。

2 減農薬栽培への取り組み

本県では 1990 年から減化学肥料・減農薬栽培の推進に取り組み、環境保全型農業を推進し当初目標の総使用量 3 割低減を達成したところである。さらなる削減のために化学合成農薬に代わる防除技術の導入を進めてきたが、導入面積の伸びは緩慢な状況にあった。しかし、中国や韓国産の野菜が輸入され価格の下落傾向が見えはじめた 1998 年ごろから、これまで比較的安定していた施設栽培野菜農家にも危機感が漂いはじめ、減農薬を中心とした安全安心な農産物の生産に農家の意識が急速に変化してきた。とりわけ八代地域では、身近にイグサの価格暴落の事例があったこともあり、農家の危機意識は高かった。

そこで 1998 年度から普及センターを中心に、輸入トマトに対抗するために減農薬栽培を全面に打ち出した八代トマトのブランド化を確立するための取り組みが始まった。

鱗翅目害虫を対象とした黄色蛍光灯を減農薬技術の柱に、コナジラミ類やハモグリバエ類の侵入増殖を抑制するための防虫ネットおよびピリプロキシフェン剤塗布黄色テープ、そして BT 剤や灰色かび病防除を対象とした生物農薬を組み合わせることで減農薬を推進した。黄色蛍光灯は果樹や花き類で実用化されている技術であるが、八代地域ではトマトで 1999 年からいち



写真-1 黄色蛍光灯とピロプロキシフェン剤塗布黄色テープの設置状況

早く実証試験に取り組み、防除効果やランニングコスト等について検討し、化学農薬の使用量を削減でき、それによる経費節減が可能であることを確認した。この結果を踏まえて管内全域で講習会、研修会が開催され、地域全体で減農薬栽培トマトの生産体制づくりが始まった。2002年には黄色灯導入農家431戸、面積にして276haの圃場で導入され、八代平野の秋の夜長を黄色の光が照らし出している。同時に全トマト農家のエコファーマー認定取得についても取り組みが行われている。

3 八代トマト「はちべえ」のブランド化

生産現場では革新技術の導入により減農薬栽培を進める一方で、生産された八代トマトのブランド化を確立するための販売戦略も企画されている。「はちべえ」のネーミングおよびシンボルマークが一般公募により決定された。それを活用しての積極的なPR活動、トマト部会による消費地での販売活動、インターネット上に「はちべえ」ホームページの開設など、知名度アップに力が注がれている。

4 八代地域で問題となっている病害虫

八代地域で発生している病害虫は前述した黄化葉巻病をはじめとし、病害では施設の大型化・固定化によって褐色根腐病やかいよう病、青枯病等の土壌病害が点発している。防除対策としては、土作りも含めた太陽熱利用土壌消毒を基本にしている。多発した圃場では土壌くん蒸剤、抵抗性台木への接ぎ木などを組み合わせて病原菌密度を低下させている。茎葉や果実の病害では灰色かび病や葉かび病が恒常的に発生し、一時期疫病の発生も確認される。害虫では育苗期から本圃にかけてオオタバコガやハスモンヨトウの被害が目立っている。特に八代地域では定植時期が早く天井ビニール被覆前に定植するため被害が大きく防除が困難な



図-1 八代トマトのシンボルマーク



写真-2 黄化葉巻病による萎縮

害虫であったことも黄色蛍光灯導入のきっかけにもなっている。また、ハモグリバエの被害も目立っている。コナジラミ類は黄化葉巻病の発生によって重要害虫としての意識付けを行い、育苗期から防虫ネットの設置を徹底指導し発生の沈静化を図っている。

III 今後の問題点

産地が直面する当面の問題は、減農薬栽培を実践しながらいかに難防除病害虫を防除していくかにかかっている。天敵や微生物農薬の登録が進み利用しやすくなったが、それだけでは不十分であり物理的防除や化学的防除を組み合わせた総合的な防除法の確立が望まれる。その際考えなければならないのは、導入技術のコストであり安定した防除効果である。低コストで効果の高い防除技術の確立に向けて、関係機関が連携しながら取り組む必要がある。

消費者が求めている安全安心な農産物を安定的に生産していくことはこれからも産地としての使命であり、また韓国や中国などの外国産野菜に対抗するためには、なお一層の努力が必要になってくるだろう。